第一節　国際化時代を迎えて

わが国が急速に進む国際化の中で、学生生徒も、国際的な教養を身につけ、語学の学習機会をつくることが重要になっており本学院は、海外での生活体験のために、昭和五十三年度から「昭和学院海外教育研修制度」を発足させた。

この制度は、本学院中学校入学時に加入し、月ごとに資金を積み立てる。この資金はアリコジャパンの三年満期の貯蓄保険を利用して、満期時に返還金を海外研修費用に充てるものである。この制度の運営は、アリコジャパンの姉妹会社の国際教育サービス株式会社がこれに当たる。昭和五十三年度は入学生の約三分の一が加入手続きをした。入学生の中の加入者は年々増加していた。

昭和五十六年の夏、第一回に加入した生徒は高一に進み、はじめて海外教育研修（ホームステイ）を実施することになった。学内では、その前年に準備委員会を組織して準備教育計画を立案し、五十六年四月には、団長をはじめ引率者が決まり、生徒には、海外生活に必要な基礎知識や、日常の会話、滞在する地域の地理、歴史などを学ばせた。また、父兄とも何度か会合をもち、この企画についての理解を深めた。

第一回海外教育研修

第一回の海外研修の参加生徒は八七名で、これを四班に分け、四名の引率教師を派遣することになった。滞在地は、アメリカ西海岸のサンフランシスコの郊外地で、国際交流事業に対し理解をもつ各家庭に配属された。プログラムは、三週間がホームステイで、その間、午前中は主として語学学習にあてられ、午後は、それぞれの家庭で家族と生活をする。最後の四週目はサンフランシスコ、ロサンゼルス、ハワイと観光して帰国するものである。

昭和五十六年、第一回海外教育研修では、学院長自らが、各滞在地を訪れ、研修の実際をつぶさに視察された。

現在、海外研修はすっかり定着し、ニュージーランドで毎年実施されている。

第二節　スポーツクラブの躍進

昭和五十年代後半に入ると、本学院スポーツクラブの活躍がめざましく、数々の輝かしい成績をあげ、全国に「昭和学院、ここにあり」の名声をとどろかせた。

一、バスケットボール部二冠に輝く

バスケットボール部は、昭和五十七年三月二十五日から東京で開かれた第十二回全国高校バスケットボー

ル選抜大会において、五十四年三月に続いて、二度目の全国優勝を遂げた。

この大会では、最初から優勝候補と目され、決勝は、愛知県の市邨学園と息づまる熱戦を展開しての優勝であった。

この年の夏のインターハイは、八月はじめ鹿児島県で開催されたが、バスケットボール部はここでも全国優勝し、インターハイ初優勝を遂げ、春夏と二冠を制した。

また、昭和五十九年三月二十六日から東京で開催された第十四回全国高校バスケットボール選抜大会において、三度目の全国優勝を成し遂げ、名門昭和学院の名を不動のものにした。

全国選抜優勝

二、軟式庭球部初の全国制覇

軟式庭球部は、昭和五十七年度インターハイ・ダブルスで、伊藤・熱田組が決勝で茨城県の鉾田二高を四―三で抑え、念願の全国優勝を遂げ、本学院庭球部の歴史上輝かしい一頁を飾った。軟式庭球部は、この年国体でも活躍し、本県を優勝に導いた。

三、ハンドボール部の活躍

ハンドボール部は、昭和五十七年三月、名古屋市で行われた第五回全国高校ハンドボール選抜大会において、準決勝で愛知県代表の市邨学園と対戦したが惜敗し、第三位にとどまった。

しかし、昭和五十九年夏、秋田で行われたインターハイにおいて、決勝戦で九州の強豪熊本市立高校と対戦し、準優勝という輝かしい成績を収めた。

四、水泳部・陸上競技部・ソフトボール部の活躍

水泳部は、昭和五十六・五十七年度と引き続き、インターハイにおいて、総合で全国第二位というすばらしい成績を収めた。種目別では、五十六年度の四〇〇メートル自由形で竹村選手が優勝したのに続き、五十七年度には、石黒選手が四〇〇メートル及び八〇〇メートル自由形の二種目に優勝した。なお、八〇〇メートルのタイムは高校新記録をマークした。一方、昭和五十七年度陸上競技ジュニアオリンピックでは、走り高跳びにおいて、倉谷選手が見事優勝した。

また、この年の島根国体では、本学院選手の目ざましい活躍により、千葉県ソフトボール部が優勝し県民の期待に応えた。

ボランティア活動で老人ホーム訪問

第三節　福祉活動の推進

本学院は、教育目標の一つとして、本学院生徒として誇りをもつという愛校心の高揚、他人に迷惑をかけないこと、他人に思いやりの心をもつという公徳心の育成に努め、よい人間づくりをめざしている。

県から福祉教育推進校の指定を受けたのを機に、高校では、昭和五十四年度より、また中学校では翌五十五年度より、生徒に社会福祉に対する関心と理解を深めさせ、地域社会におけるボランティア活動を奨めてきた。このボランティア活動を通して、思いやりの深い、善良な子どもを育てたいと願ってきた。

その成果は著しく、数多くの生徒が施設の人々への奉仕や、助け合いの募金などを通して善意の活動を繰りひろげ、各方面から感謝されている。

ことに千葉県が実施している善行の少年少女やグループに贈られる「ライトブルー少年賞」には、毎年本学院の生徒が市長より推薦され、千葉県知事より表彰を受けている。

本学院は、福祉教育推進校の指定を受けて以来、その活動は、確実に定着し、福祉教育の先進校として地

域社会の本学院によせる期待も益々大きなものになってきている。

第四節　多様な教育の発展

一、視聴覚教育の発展

昭和五十八年、本学院は、千葉県教育委員会の推薦により応募した「視聴覚教育による教育の現代への道」という本学院二十年間の視聴覚教育の実践記録が、日本視聴覚教育協会の一九八三年度視聴覚教育奨励賞（学校教育部門）の受賞の栄に浴した。この賞は、視聴覚教育教材の活用についてすぐれた成果を収めた実績に対して贈られる賞である。このことは、本学院が長年にわたって取り組んできた視聴覚教育の充実ぶりを示すものである。

表彰式は、十一月十八日、国立教育会館において行われ、十二月八日には受賞祝賀会が催され、今後一層の研究、発展を誓い合った。研究論文は、月刊「視聴覚教育」十一月号に掲載された。なお、この年は、中高教育施設整備の一環として、視聴覚館の改修も行われ、本学院視聴覚教育のセンターとしての面目が一新された。

二、校内テレビ放送のカラー化

昭和五十九年に、テレビ配線及び撮影機器が全てカラー用に改められた。翌六十年には、放送室の調整卓、各教室の全ての受像機がカラー用に整備された。これにより、創立三十周年にあたり整備された白黒テレビ放送が、カラー化へと一新された。

同時に、放送室も拡充され、資料室が完備された。

三、情報化教育の推進

科学技術の急速な発展にともない、教育の場においても、従来の商業教育から、OA化のすすむ社会のニーズに合った商業教育が求められるようになってきた。また、コンピューターも小型化され、その扱い方も容易になり、学校教育への導入も可能となってきた。

本学院でも、新教育課程における商業科の新科目「情報処理」の教育機器として、昭和五十八年九月、パソコンを導入することを計画し、NECのPC9801マークⅡを購入した。この機種は、当時最も性能が優れているといわれたもので、二五台を備え、生徒二人に一台の割合で学習する

情報化に対応しコンピューターを導入

ことができるように整備された。

その後、更に平成元年にはＰＣ９８０１Ⅱ二五台を増設し、情報化施設の充実を図り、一人に一台の理想的な学習設備で、積極的なコンピューター教育の推進に取り組んでいる。

第五節　創立四十五周年を迎えて

一、五号館新築落成

本学院に対する社会的評価の高まりから、入学希望者が年々増加するようになってきた。そこで、昭和六十年度から中高とも一学級の増加をすることになった。その生徒を収容するため、文化会館隣に新校舎五号館を新築した。昭和五十九年十月初め地鎮祭を行い、工事は秋元建設請負、設計は曽根設計事務所が担当した。翌六十年二月十六日に上棟式が行われた。規模は、鉄筋コンクリート三階建て、床面積七九四平方メートル、特別教室一室、準備室、普通教室五室である。これにより、本学院の施設設備も、より一層充実することになった。

二、創立四十五周年記念式典挙行

創立四十五周年記念式典が、昭和六十年十月十八日、十九日の両日にわたって盛大に挙行された。

十八日は、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・短期大学・栄養専門学校・秀英高等学校・同附属中学校の各々の会場で学内式典が行われ、幼児から学生に至る本学院関係者全てが、四十五年の歴史を振り返り、未来への新たな希望を胸に抱いた。

式典は、十月十九日千葉県知事をはじめ多くの御来賓の御臨席の中、厳粛に挙行された。

創立45周年記念式典　学院長式辞

式典終了後、第一体育館で祝賀の宴が催され、数多くの方々が本学院の繁栄を讃えられ、学院関係者一同未来へ向かって一層の努力を誓い合った。

第六節　教育環境の整備

一、視聴覚施設の整備

昭和六十二年度全国私学教育研究集会における視聴覚教育部会を本学院で実施するために、この方面の施設設備を見直し、改善をはかった。

施設としては、視聴覚館二階にある視聴覚ライブラリーが、教育機器の増加に伴い、効率的な利用ができない状態にあったので、昭和六十一年夏、内部を一新して、視聴覚ライブラリーとしての機能を果たしうるようにするためその改造にとりかかった。新しいライブラリーは、事務室、教材管理、教材制作の三つの部門に区画されて、それに基づいて、教育機器が整然と配置されその利用が円滑化された。

設備では、ＶＴＲの利用熱が高まり需要が増加しており、普通教室で、テレビ利用によるＶＴＲの活用をめざし、ＶＴＲ一六台を新規に購入した。

また、視聴覚教育の一環として、ＬＬ（英語演習装置）の施設設備の整備にとりかかった。今まで、新設備が半分、従前の機器が半分で、一緒に利用されていた第一ＬＬ教室について、前からの機器を新しいものに切り替えて、すべて同一機種に改めた。第二ＬＬ教室は、従前の機器を撤去して、簡易なＬＬにテープレコーダーをとり入れた新機器として、全面的な

整備された視聴覚ライブラリー

改造を行った。

視聴覚教育とは別に、六十二年度、新しく導入したものに、ワープロの設置がある。管理部門である事務室、教員室に一台ずつ設置するとともに、特別教室に二五台が設置された。本学院の情報機器は、従前のパソコン二五台に加えて、ワープロが置かれ、情報化教育が一通り完成した。

二、正面玄関の改造

創立五十周年に向け、また昭和六十二年秋に全国私学教育研究集会千葉大会が開催され、本学院にも全国より多数の参加者がお見えになるのにあわせて、正面玄関の改造にとりかかることになった。どのように玄関を改造するかは、一年余り、色々と検討し、本学院玄関にふさわしい建物が構想され、昭和六十一年七月、設計ができあがり、翌六十二年十一月十一日完成した。

その偉容は大昭和学院の顔にふさわしく、床は総大理石、壁は石張りという大変素晴らしいもので、高さも従前のものに比べて大変高くなり、ガラス面も特殊なものが使用され立派な出来映えで、「昭和学院」の文字は、本学院の創

テープカットをされる学院長

設者伊藤友作先生の書になるものである。

落成式当日は、学院長先生より、出来あがるまでのお話を含めたご挨拶があり、拍手の中でテープカットが行われ学院長先生を先頭に、御出席の先生方が、新しい玄関をお通りになった。

十一月十三日には、全国私学教育研究集会の視聴覚部会及び図書館教育部会が開催され、北海道から沖縄に至る多くの遠来の先生方をお迎えするにふさわしく、新装なった玄関で受付も行われた。

第七節　第三十五回全国私学教育研究集会開催

一、二年間にわたる事前準備

私学教育の充実発展のために、日本私学教育研究所が開催する最も規模の大きな研究集会である全国私学教育研究集会が、昭和六十二年に、関東ブロックで行われることになり、千葉県が担当することとなった。

そこで本県私学は、昭和六十年春より関東諸県（神奈川、埼玉、茨城、栃木、群馬）と連絡をとり、その準備に着手した。

なお、前年の福岡大会に本県より六〇余名の教員を派遣して、その運営、実施状況を視察した。本学院からは、久松英壽、石母田権兵衛、斉藤紀子、斎藤周一の諸先生方が出席した。

本県の研究目標は、「国際化と近代化を志向する私学教育の発展」とし、教科は八分科会、教育諸活動は八部会を計画した。会場は、交通等の関係から、おおむね、千葉市より市川市に至る地域に所在する学校にそれぞれの研究会担当を委嘱した。

本学院中学高等学校は、視聴覚教育部会を主宰することに決った。この部会は、他県でもなかなか実施できないものとみえて前年の福岡大会では実施されず、その前々年の山口大会では、主に東京その他の県の学校の研究発表が行われた程度である。本学院は、昭和五十八年度、全国視聴覚教育優秀校に選ばれたことから、本学院に指名があり、その担当を承諾することとなった。

視聴覚教育部会は、委員長の久松先生を中心として学内外の視聴覚教育委員の先生方により実施計画を進めてきた。計画では、視聴覚教室、視聴覚ライブラリー、放送センター、ＬＬ教室等の施設設備を公開し、教室における視聴覚教育に関する研究授業（ＯＨＰ、ＶＴＲ、放送教材、ＬＬ等の利用）を予定し、他に、研究発表、講演を加えて、千葉大会の華といわれる充実した研究会をめざした。

この他に、本学院の特色として図書館教育がある。同一校で両部会を実施することは避けたが、図書館教育部会が、本学院中高図書館の紹介を望んでいるので副会場として協力することになり、新たに図書館案内を作り準備した。

なお、視聴覚教育部会の委員長として活躍された久松英壽副校長は次のような手記を綴られていた。

「私が視聴覚教育部会の運営委員長に委嘱されたときは、不安と責任の重大さに身の引き締まる思いであっ

た。幸いにして、学院長先生はじめ内外を問わず多数の方々のご支援をいただき、準備は順調に進んだ。大会運営にあたっては、昭和六十一年当初から十数回にわたって役員会議が開かれ、綿密な企画と細部にわたる検討を行い準備が進められた。各分科会及び部会は、その方針に基づいて運営された。視聴覚部会では、大会前日までに七回の運営委員会を開いた」

他方、秀英高等学校においては、国語分科会を担当することになった。開校当初から、生徒が物事を自分の目で見て、自分の頭で考え、自分の足で歩いていけるような生徒を育てる一つの手がかりとして、指導してきた作文教育の成果を発表するとともに、研究授業を実施して実際の指導を公開することとし、運営委員長の斎藤周一副校長を中心として、その準備が進められた。

二、視聴覚教育部会の開催

大会開会式は十一月十一日に行われ、大会三日目、本校の主宰する視聴覚教育部会は、研究日程「未来に生きるメディア教育」のもとに全国から多数の先生方を迎えて開催された。会場校校長伊藤一郎先生の挨拶に始まり、久松英壽運営委員長より、この大会のねらいについてのお話があった。九時三十分より、五十分間の公開授業が七教室で実施された。使用されたＡＶ機器と担当教諭は次のとおりである。

ＬＬシステム（英語）土井信太郎、吉武信行教諭、ＶＴＲ・ＯＨＰ（社会）渡部照子教諭、パソコン（理科）佐久間直次教諭、十六ミリ映画（国語）山崎健彦教諭、校内放送・ＯＨＰ（ＬＨＲ）表邦男教諭、校内

放送システム（道徳）林恵一郎教諭。

その後、公開授業担当者を囲んで熱心な研究協議が行われた。

十一時より、視聴覚ライブラリー、視聴覚教室、放送センター、第一、二ＬＬ教室、プラネタリウムの諸施設が公開された。昼食後、展示会場見学の時間をとり、午後一時より、本学院の小野若命教諭「視聴覚メディアによる教育の改善をめざして」、同河野静雄教諭「放送施設の授業への活用」、の研究発表が行われた。

開会式で挨拶する学院長

充実した視聴覚施設

視聴覚教育部会の開催にあたり、新しく整備された視聴覚施設が公開された。新装なった視聴覚ライブラリーをはじめ視聴覚教室、放送センター、ＬＬ教室、プラネタリウムなどを先生方に見学していただいたが、充実した施設とその幅広い利用状況に感心しておられた。

また、デモンストレーションとして、昼食時に第一視聴覚室において、ソニー、日本ビクター、ナショナル、ＮＥＣなどの大手の視聴覚機器メーカー八社によるハードウェア及びソフトウェアの展示を行った。ＶＴＲ、ビデオディスク、ＣＤ、ＯＨＰ、十六ミリ映写機からパソコンに至る各種機器や、ビデオ教材、ビデ

オディスク教材、ＴＰ教材、パソコンソフトなどの教材が展示された。

好評を博した記念講演

視聴覚教育部会の最後を飾る記念講演は、ＮＨＫ特集「地球大紀行」のチーフプロデューサー中雄一氏にお願いした。

演題は「今、なぜ地球なのか」で、「地球大紀行」に関するデジタルビデオエフェクトなど最新技術を駆使した制作過程や、最近の地球をとりまく大気の異変について、スライドを映写しながら、大変興味深いお話をしていただいた。

大会の成果

視聴覚教育部会で懸念されたことは、参加者をどの程度確保できるかということであった。視聴覚教育は、関心をもつ先生でなければなかなか参加しないので、一〇〇名集まればと期待したが、予想を上回る一二三名を数え、過去のどの視聴覚教育部会よりも盛況で充実したものであった。

また、遠来の客を気持ちよく歓迎する、会場の整頓美化につとめることに努力し、教職員、奨学会理事の方々の支援により部会は大成功であった。

三、図書館教育部会の開催

図書館教育部会は本会場を市川高等学校、第二会場を本校図書館として、昭和六十二年十一月十三日開催された。この集会をもつにあたり、「国際性、近代性をはぐくむ学校図書館のあり方」の目標に適合するよう、蔵書の充実につとめ、館内には絵画の展示をするなど図書館の雰囲気づくりがなされた。研究発表では、本校の斉藤紀子教諭から「読書傾向の変遷――本校三十年間の読書調査の分析――」が行われた。また、「本校の図書館運営について」と題して、斉藤紀子教諭から、学校の現状が報告された。参加された先生方はいずれも、司書教諭や実務にたずさわる方で、研究討議は専門的で実のあるものであった。

第八節　教育内容の充実に向けて

一、中高一貫教育の充実

昭和六十一年十月に教育課程審議会において「個性を生かす教育の充実」と「習熟度別の指導」等が提案された。

このような情勢の中で、本学院でも、従前から私学の特性を生かした中高一貫教育がなされ、生徒指導や

特別活動等においてその成果をあげてきたが、これに並行して六年制中等教育を、先導的試行として前年度から実施した。

そのねらいは、㈠生徒個々の成長を段階的に積み上げて、自主性・創造性を身につけた人間を育てる、㈡生徒個々の個性や能力を伸ばし、個性豊かで心身共に健全な人間を育てる、㈢中高六年間の一貫した中等教育により、生徒個々の学力の向上を図る、ことにある。

その指導は、中高六年間の指導内容の精選化・集約化を図って進度を早め、中高五年間に学習内容を短縮し、高校三年次におけるゆとりの時間を、進路指導や選択学習に充当し、生徒の実態に即して効率化を図り個性や能力を伸ばす指導をする。この教育課程は、中学校三年時に特別課程クラスを編成し、特別なカリキュラムで指導する。例えば、英語、数学は二学期の半ばから高一の学習内容に入る。また社会・理科は高一の学習内容も関連づけて同時に指導する。

今日の私学志向の社会の期待に応えるためにも、今後、本学院中高一貫教育の一層の充実発展を図らなければならない。

二、教育研修活動の活性化

本学院では、前々から、現職教育及び初任者教育を実施している。現職教育は、月一回研修会を開き、教育実践上の諸問題について研究発表し、それに対する討議が行われる。初任教員に対しては、年度はじめ数

回の指導を行う。しかし昭和六十一年度より一層研修活動の活性化をめざし、その改善をはかった。

初任者教員の研修では、年間十回の研修計画のもとに教科指導、生徒指導、学級経営、ホームルーム、道徳の指導、その他、学校業務の指導などについて幹部教員がこれに当たる。なお、助言者制度を新設して新任教員それぞれに、ベテラン教員を配して、その指導に当たる。さらに、幹部教員研修会を第一学期に一回、第二学期に一回実施し、中堅教員研修会を第三学期に実施する。本学院の当面する教育課程を検討し、有意義な研修を終える。また、教科研究会は月一回定例日に実施し、学年会は週一回水曜日に行う。

本学院は、教員の研修活動を進め、教員資質の向上発展につとめている。

第九節　学院長中国への旅
――第九回千葉県私学日中友好訪中――

昭和六十一年七月二十六日から八月六日まで、学院長伊藤一郎先生は第九回千葉県私学教育者友好訪中団の団長として中国を訪問され、北京、四川、上海、蘇州を視察された。

学院長先生は、昭和五十四年八月、第二回友好訪中団の団長として北京、ハルビン、長春を訪問されており、今回の訪中は、七年ぶり二回目である。

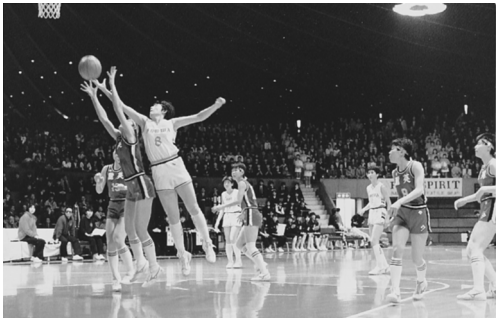
第十節　学院長五度目の文部大臣表彰に輝く

昭和六十二年十一月二十七日、学院長伊藤一郎先生は、長年の私学教育発展に尽くされた功労により、中島源太郎文部大臣より、私立中学校・高等学校教育功労賞を受賞された。学院長先生は、昭和四十九年十一月には、産業教育功労賞を、五十一年十一月には教育功労賞を、昭和五十五年五月には、短期大学教育功労賞を、五十六年九月には、私立学校審議会委員として、文部大臣表彰を受けている。また五十年十一月には、栄養士養成の功労者として厚生大臣表彰を受け、五十二年十一月には、藍綬褒章を受章されている。今回は五度目の文部大臣表彰となった。

第十一節　スポーツクラブ全盛を極める

昭和六十一年から六十三年にかけて、本学院の運動部の活躍はめざましく、高等学校バスケットボール、ハンドボール両部が春の選抜大会にダブル優勝した。また、短期大学の軟式庭球部は三年連続大学日本一になった。

一、バスケットボール部連続全国優勝の快挙



バスケットボール部５度目の全国優勝

昭和六十一年度、全国高校バスケットボール選抜大会は、三月二十六日より二十九日まで、国立代々木第二体育館を中心に行われ、本校チームは、昭和五十四年、五十七年、五十九年につづき、二年ぶり四度目の優勝をとげた。準決勝では近畿第一位の甲子園学院と対戦し、これを破り決勝に進出した。決勝は、東京一位の明星学園と対戦し、シーソーゲームを展開し、逆転し優勝した。

また、同年十月に行われた、かいじ国体では、本校バスケットボール部の九名の主力選手が中核となり、千葉県選抜チームとして活躍、準決勝で石川県選抜と対戦、辛くも勝ち、決勝で愛知県選抜を降して、インターハイの苦杯を見事雪辱し、本県としてはじめての国体優勝を飾った。続いて昭和六十二年三月二十九日、全国高校バスケットボール選抜大会の決勝戦が代々木第二体育館で行われた。選手のコンディションは最高であり、圧倒的に、しかも余裕をもって勝ち進んだ。準決勝では、名古屋短大附属高校を八五－七五で破り、決勝は、最初、薫英高校のリードを許したものの、本校の応援席の声援に応えて、前半で六〇－三一とリードを奪い、後半二八－二七で逃げ切り、栄光の勝利を手にした。この優勝は前年に引き続き二年連続であり、

通算すれば五度目の優勝という輝かしいものであった。

二、ハンドボール部初の全国制覇

昭和六十二年度の本学院スポーツにおいて、特筆すべきことは、春の全国高校選抜大会に、バスケットボール・ハンドボール両部が揃って、全国優勝したことである。

全国高校ハンドボール選抜大会は、昭和六十二年三月二十四日から二十八日にかけて名古屋市で行われた。

ハンドボール部は、これまで、全国選抜大会第三位が二回、また、インターハイ準優勝と、今一歩のところで優勝を逸してきた。この大会は、終始一点を争う延長戦で、準々決勝では、熊本市立女子高を二〇－一八と延長の激戦で破り、準決勝では、川口青陵高校をおなじく延長で、一六－一五で破って決勝に進み、宮崎の本庄高校を一三－七で破って優勝した。薄氷を踏む思いで、全国初優勝の宿願を果たすことができた。

三、堂々の優勝パレード

春の全国高校選抜大会に、バスケットボール・ハンドボール両部が揃

ハンドボール部初優勝

って、全国優勝をしたことは、本学院初めての快挙であり、市川市にあっても市の一大イベントであった。そのために、市内パレードが計画され、昭和六十二年四月七日午後、市川市消防署ブラスバンドを先頭に、市役所から本学院まで、両部監督と選手による優勝パレードが行われた。道行く人達も、何事が起こったかと数多く集まった。本学院校庭では、中高全生徒が待機しこれを歓迎した。この祝賀パレードは高橋国雄市川市長のお力添えで市川市としては初めてのパレードとなった。まず市川市庁舎前で、開会宣言、両部を代表して村松バスケットボール部主将の優勝報告、市川市長の祝辞、西塚建雄・笠原利宏両監督へ同窓会からの花束贈呈、閉会宣言の後、市庁舎前から本八幡駅へ、市川市消防署ブラスバンドを先頭に選手、応援バトン部のチアガールとパレードは進み、駅前でのセレモニーの後、本学院まで堂々のパレードが続き、市民の方々からも大きな拍手を受けた。学院では、第一体育館の渡りを舞台に学院長先生ご夫妻のご臨席のもと、華やかに選手の紹介、ブラスバンドの演奏、バトントワリングなど、盛大に展開された。最後に祝意を表し、風船三、五〇〇個を全校生徒が飛ばし、素晴らしいフィナーレとなった。風船は色とりどり南風にのって北の空に高く飛んでいった。

バスケット・ハンド、優勝パレード